

5月

保育の広場

今月の保育の広場は、毎日がとても慌ただしく育児や仕事に追われているような気持ちになりますが「今の子ども達との時間を大事にしよう」「いつまでも続くわけではない、貴重な時間だ」と感じられるような詩を紹介します。

『ママの毎日』

独身の頃

ヒールの靴が好きだった

お酒は苦手だったけれど友達と過ごすお酒の場の楽しい雰囲気が好きだった

好きな音楽はミスチルでいつもウォークマンに入れて好きな時に聴いていた
電車の中でゆっくり本を読むのも好きだった

お風呂では半身浴をして

美容院には2ヶ月に1回は必ず行っていた

お化粧するのも好きだった

1人で行く映画館が好きだった

流行りの雑誌を買い

流行りの曲を聴き

流行りの服を着て

流行りの場所へ好きな時に出かけた。

そんな私は 今

泥だらけのスニーカーを履き

子どもたちの着替えやオムツが入った大きなバックを肩にかけ

ちゃんとした化粧もせずに

髪を一つにくくり

毎日

子どもたちの手を繋いで公園へ散歩に行っている。

聴く曲はミスチルからアンパンマンマーチに変わった。





眺めているのはファッション雑誌から
子どもの母子手帳や幼稚園からの手紙に変わった。
考えていることは

今日の夕飯のメニューと

長女が幼稚園から帰ってきたあとのおやつ、お風呂、夕飯の流れの確認。

今日の天気で洗濯物が乾くかどうかと
明日の長女の遠足が晴れるかどうか。

最近眠くなると激しくぐずる長男を昨日つい怒ってしまったから

今日は早く寝かせてあげよう。

今日は怒らないでやすみをしよう。

そんなこと。

毎日押し流されるように迫ってくる日常があるから

キレイに片付いた部屋も

大の字で朝まで眠れる夜も

ゆっくり塗れるマスカラも

なんだかもう思い出せない。

そう。

思い出せないから

私たちはつい忘れてしまうのだ。

この毎日が

ずっと続かないということ。

1人でゆっくりお風呂に入れるようになったら

湯船の中 あなたと向き合い数を数え

柔らかく響いたあなたの声を

私は思い出すでしょう

1人で好きなだけ寝返りをうち眠れるようになったら

どこまで寝転がっても隣にいないあなたのぬくもりを



私は探すのでしょう

好きな音楽のCDを好きなだけかけられるようになったら

この部屋の中に溢れていたあなたの笑い声を思い出して

私は泣くのでしょうか

好きなだけお化粧に時間をかけられるようになったら

私の洋服をひっぱり

膝の上によじ登り

私のやることなすことをお邪魔してくるあなたのその小さな手を思い出して

私は泣くのでしょうか

好きなだけヒールが履けるようになったら

笑い転げるあなたを追いかけて走り回り

泥だらけになって遊んだあの空を思い出して

私は泣くのでしょうか

自分とパパの洗濯物だけを回す日々が訪れたら

砂まみれの靴下も

おしっこを失敗したズボンも

牛乳をひっくり返したシャツも

洗濯カゴにないことを知って

私は泣くのでしょうか

あなたの足音がしない部屋の掃除機をかける日が訪れたら

粉々になったビスケットの食べこぼしも

小さなおもちゃの部品も

あなたの細い柔らかい髪の毛も落ちていないことを知り

私は泣くのでしょうか

1人で好きなことを

好きな時に

好きなだけ出来るようになったら



どんな時も「ママ」「ママ」と私を呼び

どんな時も私のことを探しているあなたの姿を思い出して

私は泣くのでしょうか

一体いつまでであるのかな

一体いつまでここにいてくれるのかな

そして

そんなことを考えているうちに

また今日も終わってしまった。

私たちの日常は「子どもが側にいる『今』」だから

子どもから離れて1人になった瞬間が特別に感じて

好きなことを堪能できる喜びを噛み締めるけれど

でも自分の人生を考えてみたら

特別なのは

本当は子どもが側に生きているこの毎日の方。

でも私たちはそれを忘れてしまう。

なんだかずっと続くような錯覚を起こして毎日を過ごしているけれど

大変に思えるこの毎日に

数えきれない愛しいが散りばめられていることを

私たちはいつか知のです。

子どもたちが

この世に生まれてから今日まで

ママとパパのために

全身を力いっぱい使って思い出を撒き散らしてくれていたことに



私たちは過ぎてから気付くのです。

ママの毎日は

ママでいられる毎日です。

私たちはこの命が尽きるまで

どんなに子どもと離れていても子どもを思い、心配し、愛し続ける子どもたちの母親だけれど

でも子どもたちの側で『ママ』でいられることの出来る日の

なんて短いことかを

いつか思い知るのでしょうか。

今日もあなたは

屈託のない笑顔で振り向き

「ママ!」と言って

両手を広げてこちらに飛び込んでくる。

忘れるものか。

絶対に。

絶対に。

あなたの前髪を切り過ぎて笑った昨日を。

あなたを怒って自分に涙が出た今日を。

あなたの寝相に笑った夜を。

あなたが摘んでくれたシロツメクサの白さを。

あなたに許された私を。

あなたがいてくれるこの毎日を。

私は絶対に忘れない。



ミスチルも好きだけど

Eテレの歌に感動することを知った

ヒールも好きだけど

スニーカーの安心感が好きになった

自分のことが一番大切だった

そんな私に

自分の命よりも大切だと思える存在がこの世にはあると教えてくれた子どもたちに

心から感謝を。

